

北海道の西南端、福島町から少しお話をさせていただきます。

最初に是非読んで欲しい文章を紹介させていただきます。後はたわいも無い話ですので、これだけは、読んでいただければと思います。

(12月9日：青少年の主張大会)

「学校への道」

北海道福島商業高等学校2年A組 川口 敦子 さん

「学校とは、何のために行くのだろう？」

そう考えたことがある人は多いと思います。私も小さい頃に不思議に思ったことがあります。今なら「勉強が好きだから」、「友達と話をしたい」など、答えは簡単に出せます。

なぜ、私が「学ぶために学校に行きたい」と思えるようになったのかを考えてみました。それはきっと、小学生の頃から今までに出会ってきた素晴らしい先生方のおかげだと思います。理解できるまで根気強く教えて下さった先生、悩んでいる時に励ましてくれた先生、進路について一緒に考えてくれた先生。私のために先生方がなされてきた御指導を数えあげるときがありません。

考えてみると、そのような良い先生に出会うことができたのも、「学校」という場所があったからです。中学校までは義務教育で地元の学校に入学します。私は、義務教育という言葉に疑問を抱いています。辞書には「国民として受けなければならない教育」とあります。前は私もそう思っていました。しかし今は、「誰もが平等に教育の機会が与えられること」だと思っています。ありがたいことに、この国には武器を持たなければいけない子供はいません。日本では鉛筆を持ち、普通に勉強することが出来ます。世界には、学校に行くことも叶わずに、戦争に巻き込まれながら懸命に毎日を生きている子供たちが大勢いるのです。ですから私達は、平和であることに感謝しながら、懸命に毎日学ばなければならないのだと思います。当たり前のように通った小中学校。そして高校への進学となると、自分の学びたいことや、将来の進路など様々なことを考慮しながら学校を選ばなければなりません。しかし、今、この町の子供達の将来の選択肢が一つ消えるのならどうなるのでしょうか。そうです、福島町の唯一の高校、福島商業高校の存続問題です。

学校存続のための基準、それは主に人数の多さで決められています。しかし本当に、生徒数が多ければ多いほど良い学校なのでしょうか。そうとは限らないと私は思います。なぜなら、「質より量」という考え方は良くないからです。質というのは、心の豊かさや向上心、思いやりの心のことであると考えます。量とは、見せかけだけの物質的なものだと思います。そのため、存続問題という以前に、この学校の内面的な良さをもっと多くの方に知ってもらいたいのです。

本来この学校が建てられたのは、町の人口が増えたからなのでしょう。それは違うと思います。「勉強したい」、という向学心にもえた多くのかつての子供達が願った結果なのではないのでしょうか。その方々の思いが無ければ、現在の私達福島商業の生徒は存在することが出来なかったことでしょう。

「形あるものはいつか壊れる」という言葉があります。そして、「人間の体が減んでも魂は消えない」という言葉もあります。形あるものが壊れるなら、学校の存続問題も不思議ではありません。しかしそこで培われた学びの精神は消えることが無いでしょう。確かに、有形の物は、無形の物に勝つことは出来ません。ですが、無形である心を育てる有形の学校が無くては、成長の場が減らされてしまいます。

ネイティブ・アメリカン達は、いつも7世代先の人々のことを考えながら物事を決めると学んだことがあります。これからこの世界で暮らす人々のためにも、もっと世界を良くしていくように努力しているそうです。私は、この心構えを見習いたいと思います。今の私たちが幸せに過ごせることだけではなく、これから後世になってこの町で暮らす人々が、もっと幸せに暮らすことが出来るように考えていくべきなのだと思います。現在の利益を考えたり、今この時だけを見て物事を判断するのではなく、長い目で見ると町にとって必要なのが、この学校なのではないのでしょうか。

私には今、守りたい物があります。それは、私の大切な学校、福島商業高校です。まだ高校生活は一年ほど残され

ていますが、与えられたものは大きいのです。この高校に入学し、私は、将来の夢である養護学校の教師への思いを今まで以上に強くすることが出来ました。今までに教えられた事を生かし、同時に子供達から多くの事を学びたいと思っています。

私達が学校で学んだことを、嬉しかったこと、努力しなければいけないこと、それらを次の世代の皆さんにも味わってほしいのです。そして夢を見つけ、実現させてほしいのです。

歩いた後に道が出来るのなら、この学校はどのような道を歩いているのでしょうか。それはきっと正しい方向に向かっていくことでしょう。

そして、これからもここで学ぶ多くの生徒に進むべき道を示してくれることを心から願っています。

毎年各学校の学校祭、学習発表会等で子供達の話聞く事を楽しみにしております。テーマは「いじめ問題」「環境問題」「戦争と平和」「夢・将来」「町への思い」「友人・家族」等々、身近な問題から社会問題まで幅広く、子供の視点で語る素直な思いを感じながら、時には涙をぐっとこらえ、時には自分への叱咤激励？と聞く事もあるほどしっかりとした提言も沢山あります。福島の子供達は、大丈夫、心配なく素直に育っていることを確信しほっとする機会でもあります。

福島商業高校は、昭和 26 年に開校、定時制から普通科そして商業科、町立から北海道立へと変遷、12,000 人を超えていた人口が半減していく中で、二間口が特例二間口、そして平成 17 年度、条件の 30 人が確保できずに一間口となり適正配置計画の方針から統廃合へと大きくシフトすることになってしまいました。通学困難区域としての対応があるとしても現状維持はさらに厳しくなりました。少子化傾向が続く状況で、普通科志向、函館志向等、生徒の自主的な選択に負う要因はありますが、間口削減問題が提起されても何ら対応しなかった事は、結果として大きな責任回避と言われても致し方ないと思います。

学区制の廃止・総合学科の創設・中高一貫教育・単位制の導入と、少子化・社会情勢の変化に対応した取り組みが実行されておりますが、多くは、普通科への対応であり、職業学科としての取り組みは、圏域での拠点校化と言う統廃合の方針のみと言っても過言ではありません。中卒者の減少、産業構造や就業構造の変化、普通科志向の増加傾向の中、地域における職業学科の役割等を見極め、総合学科を含めた普通科と職業学科の入学定員の比率を検討する事となっておりますが、北海道財政の逼迫した状況を考えると、新たな財源の創出は難しく、歳出の尚一層の厳しい削減が求められてくる事は、間違いありません。

大変厳しい状況ですが、ようやく行政が先頭に立ち、学校・保護者・学校 OB・地域等、町全体で取り組む組織を立ち上げました。福島町の将来を担う子供たちの高等教育をどうするのかを熟慮し、英知を出し合い、さらなる強力な実行動をしなければならないと思います。

子供達の純粋な思いをしっかり受け止めて、大人の責任を取る覚悟をとの思いを新たにさせられました。統廃合回避への苦悩は続きます。

(12月2日)新潟県湯沢町議会で議会運営委員長として頑張っている高橋さんのHP「日々思うことあり」が8月31日以降更新されていない。議員の個人評価を単独で実践、私も何度か伺い指導もいただき、結果として福島町議会の評価制度をスタートさせる大きな力となりました。交流を機会に毎年11月には美味しい魚沼産のコシヒカリが届き、こちらからは、海の幸を送る付き合いが続いております。今年は、活アワビを送ったのですが、貝のついたアワビは初めてだったようです。早速電話で調理方法の伝授となりましたが、「9月に手術をして退院したばかり・・・」との元気の無い声に驚いてしまいました。HPは毎日20件ぐらいカウンターが進んでおります。私と同じような気持ちで高橋さんのHPを見ている方がいるのだと思います。元気で復帰する事を確信しつつ毎日HPを見ております。

(12月10日) ライオンズクラブでは地域の高齢者を対象に「クリスマスの夕べ」を開催、38回目となります。準備から後始末まで全て会員が作業をし、司会・給仕はもちろん、歌・踊り・二人羽織・ひげダンス・ドジョウすくい等々役者もこなす大活躍です。私の役割は、給仕と挨拶そして最後に恒例の「チャンチキおけさ」を歌う事、今年もまた同じ、会員のうわさでは、持ち歌はこれだけとなっているようです。挨拶では、健康のための「五つのちよっとだけ」(①歩きましょう②食べましょう③読みましょう④出かけましょう⑤笑いましょう)の話と「寿限無寿限無」の話をしました。温泉にも入り、今年もまた大いに笑い楽しんでお土産をたくさん抱えて帰って来ました。

(12月18日①) 息子の友人の紹介で、今年初めて、りんごの木オーナーになった。昴林(こうりん)と言う新しい品種の木が二本割り当てになり孫達と一緒に初めての楽しいりんご狩りを経験した。会費以上の収穫もあり知り合いにもお裾分け、りんご大好き人間の私は、いつものようにハイペースで消化、在庫が底をつき、りんご園に追加買出しとなってしまいました。昴林の甘さ・美味しさになれた口は、ふじ・おうりん・つがる・ジョナゴールド等の品種を受け付けず、困った事になってしまいました。在庫はあとわずか、来シーズンまで我慢するのが大変だ。

(12月18日②) 町広報新年号の原稿をようやく送信、何時ものごとく前日深夜の完成となった。「開かれた議会」の基本的な考え方の確認、地方自治体の不祥事の要因となっている「お金の使い方」、そして再度「自治(まちづくり)基本条例」の制定を呼びかけ、「開かれた議会づくり」の集大成として「議会基本条例」制定の準備を開始したいと伝えた。行政も住民もそして議員もどう反応するのか、不安でもあり楽しみでもある。

この3日間、通夜・告別式の挨拶原稿代筆、定例会に向けての「委員会意見の添削」「議員発議案の説明口述代筆」、息子の機関紙掲載原稿の添削と気持ちが落ち着かず、何時ものように深夜のパソコンとなってしまいました。

(12月20日①) 定例会が終了、忘年会をかねた懇親会、もちろん会費制。議会事務局長は「八海山」、何時もは、すっきりと冴えた辛口の「菊水・無冠帝」にこだわる副議長も「八海山」を所望、私は、何時ものごとく一杯だけビール、確かに一口目だけは美味しい、頃合いを見て、これまた何時ものようにウーロン茶が届く、何年かかって定着したのだろうか。

何年か前、下戸の私をみかねて? 金澤副議長は、大伴旅人の讃酒歌十三首から「なかなかひととならずは酒壺となりてさらに酒にしみなん」と言う酒飲みが勝手に酒を讃美する和歌を贈ってきた。酒壺のように一度酒を浴びるだけ飲んでみなさい、酒飲みの心情がわかり、人並みの付き合いができるようになるとの温かい配慮である。しかし、本人たちの酔態(妖態?)を見る限り、私ぐらいは、正常でいなければとの思いをする事も度々であるのも間違いのない事実である。その後、何度か「酒飲みの五段階評価」(①微飲②軽飲③清飲④痛飲⑤泥飲)の話をし、痛飲・泥飲にならないよう注意をしていた。しばらくは、飲み会の誘いが減っていたような気がする。

(12月20日②) 「道民の船」36会の写真が届いた。今年は東京出張とぶつかり残念ながら出席できなかった。30年以上経つと6歳の年齢差は全く無く、写真をみるかぎり白髪や髪の薄さもありクラス会の雰囲気である。私が26歳のとき、成人した青年、社会教育活動のリーダーとして活躍する婦人を対象に北海道の主催で「道民の船」事業が始まった。分団長として36人を引率、英国籍・1万トン・コーラルプリンセス号で韓国・香港・タイ・シンガポール・フィリピンと約一ヶ月の船旅でした。寄港地や各国の青年達との交流の思い出もありますが、テレビ・ラジオも新聞も無い状況で、一番の収穫は、遠く離れて、じっくり自分の置かれている状況を確認できた事、日本の良さを知り、故郷の良さを再認識できた事だと思います。その後の活動に大きな影響を与えた事は間違いなく、知らず知らずのうちに自分の終の棲家はここだと意識始めた時期でもあったと思います。ちなみにその後、海外旅行は、ありません。機会があっても出る

気になれないのは、もしかして、その時のトラウマがあるのでは？

(12月24日①) 毎週日曜午前11時から松山千春の語りで「季節の旅人」と言うラジオ番組がある。辛口トークは政治・社会問題・芸能・スポーツと幅広く、今日の話は有馬記念、ディーブインパクト、コスモバルクと専門家顔負けの解説が続く、結果は間違いなくはずれであると私は予想する。大晦日の紅白歌合戦についても辛口トーク、今回もまた北島三郎が「祭り」、鳥羽一郎が「兄弟船」を歌うマンネリ化を批判していた。松山千春は2006年の1曲を、湘南乃風の「純恋歌」と絶賛していた。

「目を閉じれば億千の星 一番光るお前がいる 初めて一途になれたよ 夜空に響け愛の歌……」

自分にこんな青春時代があったのだろうかと妻に問うと「あるわけ無いでしょう！」と簡単に答えが返ってきた。

ちなみに私の車のCDは、①松山千春②浜田省吾③矢沢永吉④尾崎豊⑤中島みゆき⑥小田和正⑦遠音⑧小澤征爾と設定されている。青春時代へのノスタルジーと言ったところでしょうか。

(12月24日②) 知人や管外からの客人におすすめの函館ラーメンの店がある。「りんさんのラーメン」は戦後まもなく昭和23年に開店、現在は湯の川温泉街から函館山に向かう海岸線にある。7月に熊本から来た知人を連れて函館空港から直行すると休業の貼り紙、その後、何度か寄ってみても閉店、心配していた。ようやく再開の情報に、息子夫婦、孫達と食べに行った。ご主人が手術で入院、4ヶ月間休んだとの事、少しやせた感じはしましたが元気に調理しており、店は私たち同様、待ち焦がれていたお客で満席でした。私のお気に入り、「塩ザーサイラーメン」、麺・スープはもちろんですが、トッピングされる細い鶏肉のから揚げは絶品です。札幌のみそ、旭川のしょうゆ、博多のとんこつ、長崎のちゃんぽん、喜多方、鹿児島等々、ラーメン行脚？の結論は、函館ラーメンが一番と自分では納得している。機会があれば是非一度本物の函館ラーメンを味わってみてください。ちなみに我が福島にも昔風「川村のラーメン」がある、昔から食べなれた味は、私にとっての故郷の味である。

(12月25日) 先月末、息子の嫁のおばさんがギリシアから10数年ぶりに帰郷、是非会いたいと、こちらが接待される宴席での初対面でした。アテネから日本への直行便は無く、息子さんがいるロンドンを経由してきたとの事、日本を離れて30数年、話を聞きながらエネルギーな行動力に感心するばかりでした。「一度みなさんでアテネへおいでください。ご案内させていただきます。」と簡単に言われたものの「機会がありましたら」と言うのが精一杯でした。息子家族は、旅行会社からパンフレットを取り寄せ、積み立てを始めるようですが、何時まで続くか、そっと見守りたいと思います。ちなみに日本へのルートは、ミラノ、ハンブルグ経由もあるそうです。

ギリシアのおばさんへのお土産は、ようかん・そば・昆布・お茶・のり・現代用語の国語辞典・写真等々少し欲張ったせいか、送料が一万七千円を超え、嫁はびっくり、家内は私が入れた辞典の重さを残念がる始末でした。こんな送料で驚いているぐらいなら、ギリシア旅行は夢のまた夢と笑ってしまいました。

(12月27日) 遅れましたが、結びに、少しだけ北海道福島町の紹介をさせていただきます。

北海道の西南端、函館市から車で2時間ぐらい西の位置にあります。隣は北島三郎出身地の知内町、江戸時代最北の藩・桜の名勝・松前町です。津軽海峡を挟んで津軽半島がはっきり見えます。

視察に来られた方には、福島町に3つの日本一があると紹介しております。

- ① 世界最長の青函トンネル(延長53.85KM・海面下240Mに海底駅)
- ② 二人の大横綱の出身地(千代の山・千代の富士)
- ③ スルメ生産日本一

青函トンネルを紹介する記念館、二人の大横綱を顕彰する記念館もあります。

福島の「横綱スルメ」は、品質・味とも天下一品です、是非ご賞味ください。

昆布養殖も盛んですし、近年は、海峡でのマグロ漁も成果をあげております。

と言う事で、私の名刺では「横綱スルメ」と「二人の横綱」、金沢副議長の名刺では「昆布」を分担してPRしております。これを機会に、ご一報いただければ幸いです。